

# プラントとイクラとストープと

東京大学社会科学研究所教授 中村圭介



Profile なかむら・けいすけ

1952年生。東京大学社会科学研究所教授。専攻は労使関係論。主な著書は『日本の職場と生産システム』『成果主義の真実』『実践！自治体の人事評価』など。

根浜海岸にある宝来館の玄関をはいたすぐ右に、黒いがっしりとしたストープがある。昔なつかしい、ほのぼのとさせるストープがある。石村工業の製品である。

## 構内下請け

石村工業の創業は昭和三四年。半世紀の間、釜石で頑張っている企業である。もともとは釜石製鐵所の設備修理を請け負う構内下請けであった。

もっぱら製鐵所内で作業をしていたのだが、昭和四九年には釜石鉄工団地に自社工場を建設した。製鐵所以外の仕事もしなければという、創業者（現会長）の強い思いからである。ビル用の鉄骨を製造していたそ

うである。とはいえ、製鐵所依存度は高かった。全面的とっていいほどであった。

## 釜石地区鉄工青年協議会

だが釜石製鐵所の合理化はどんどん進んでいく。仕事も減っていく。生き残るためには、いやが応でも製鐵所以外の仕事を探さざるを得ない。昭和六〇年、二代目の現社長は同じ志をもつ若手経営者四人とともに釜石地区鉄工青年協議会を設立する。自分たちで技術を開発し、受注先を開拓する。これが目的であった。社長は語る。

「おい、何かしないと高炉休止と同時に我が社も終わりだぞ。協力しあってやってみる。朝飯を食いな

がら親父がボソツと一言。昭和六〇年のある朝、我が家の食卓のことでありました。」(※1)

釜石青年会議所のメンバーで互いに気心の知れている若い五人による出発である。「釜石の企業は製鐵所に楯突かないかぎり仕事がもらえた。だから、営業力もない。一人じゃ怖くて営業に出られない。それが数人一緒なら行きやすいじゃないですか。」

## 釜石の外へ

「みんな一緒に」釜石の外へ出る。岩手県の主催する会議に出席する。仕事を出したい県外企業と仕事をもらいたい県内企業とのお見合いの場である。

何度かのお見合いで千葉県のメーカーとの商談が成立する。新幹線を持ち上げるリフティングジャッキ製造の話が持ち込まれる。仲間と共同して部品加工から最終組み立てまでを行う。

「とにかく動き出してみますと各方面から色々な支援や協力を頂き、行動することの威力を実感したものでした。」(※2)

「行動することの威力」。勇気を与えてくれる言葉である。

## 岩手の外へ

「釜石市から岩手県に出るだけでも刺激があったので、もっと広いところでいろいろいる人と会ったら、なにか道が開けるのではないかと考え、

活動の場を日本青年会議所に求める。そこで全国から集まる同世代の経営者たちと出会う。いろいろと刺激を受けた。

交流が受注につながることもあった。埼玉県メーカーから大型クレーンの製造を依頼された。品質、納期、安全面での注文は当然うるさい。だが、釜石製鐵所で仕事をしてきた経験がここで生きた。

## 大物加工

釜石には造船所や製鐵所がある。大きい物を作るのが得意なところだ。この特色を生かした新しい産業を興せないか。社長は当初、そう考えた。だが、大物はことごとく失敗する。



石村工業のペレットストーブ「クラフトマン」。手前は燃料の木質ペレット。



東京大学社会科学研究所  
希望学プロジェクト特別寄稿

技術的に問題があった訳ではない。試作品は成功する。コストが掛かりすぎたのだ。実用化するには高すぎた。アワビの養殖装置「人工海底」、メガフロート(超大型浮体式構造物)、自動車運搬船のカーデッキ。いずれも製品化に失敗する。カーデッキでは「会社をつぶしそうになり」、いまでも借金が残っているという。「いろいろやって大型構造物はダメだということがよくわかった」。

## 省力化機械

小さくても付加価値の高いものへと社長の考えは変わる。その一つが省力化機械。自分は機械工学、専務の弟は電子工学。二人が組めばメカ

トロニクス分野に進出できる。

話は思いがけないところからやって来た。地元の水産加工業者から「イクラを自動的に量れる機械を作れないか」と相談されたのである。イクラを百グラムずつ手作業で容器に入れることを考えてほしい。スプーンでイクラをすくって量る。それも百グラム。イクラは粘るし、つぶれやすい。面倒な作業であることはすぐ想像できる。これを自動でやってしまおうというのである。

この開発は見事に成功した。すでに、イクラ自動計量充填機として売られている。現在もこうした省力化機械を開発中である。

## クラフトマン

平成二五年、石村工業は新製品を売り出した。環境にやさしいストーブ、クラフトマンである。燃料は木質ペレット。木が多すぎると森林はダメになる。密生しないように木を切つてやる必要がある。伐採された木や木くずを粉々にし、圧縮し、形を整えたものが木質ペレットである。クラフトマンは木質ペレットだけで連続八時間燃え続ける。薪もOKだ。販売はすこぶる順調である。宝来館の玄関脇に置かれているのがこのクラフトマンである。

## 協力者たち

企画を石村工業に持ち込んだのは岩手県工業技術センター。センターは技術面での協力者も紹介してくれた。薪の燃焼効率を高める技術を研究していた福田木工所である。この技術を木質ペレット用ストーブに応用したのだ。

デザインは県立産業技術短大のデザイン科の教授の全面協力を得た。昔からの飲み友達である。日曜日になると夫婦で石村工業に来て、発泡スチロールを使いながらストーブのデザインを考えてくれたという。

## プラント工事

とはいえ石村工業の現在の主力事業はプラント関連の工事である。売上高の六〇%を占める。取引先には東証一部上場企業の名前もある。もはや一社専属下請けなどではない。そしてイクラは売上高の一〇%、ストーブは三〇%をそれぞれ占めている。

本文14ページ※1・2

二〇〇六年発行、協同組合テクノポート釜石『あどばんす 協同組合テクノポート釜石創立二〇周年記念誌』より